様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２９０

研究課題名（和文）近代における朝鮮時代絵画の収集と展示

研究課題名（英文）The collection and exhibition of Joseon Dynasty paintings in modern

研究代表者
渡邊　雄二（WATANABE, YUJI）

九州産業大学・芸術学部・教授

研究者番号：２０５９０４４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：近代において日本がどのように朝鮮時代絵画について関心を持ち、理解をしたかというテーマに沿い、植民地朝鮮の公的な施設や民間において行われた絵画の収集展示活動を通して検証した。これには韓国の近代的な視点での美術という新しい価値観が生まれる経緯の考察を伴うのであるが、それは植民地朝鮮での博物館施設における収集展示活動により確定されたといえよう。そして、民間においても、当初、日本人を中心に収集活動が盛んになり、次第に朝鮮人も加わった美術市場が開かれた。ただし、韓国の伝統的絵画の理解という点では、関わった研究者は関野貞などわずかの人物であり、朝鮮時代の書画活動を深く理解するには到らなかったと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近代における韓国の伝統的美術品とくに絵画の収集・展示についての考察は数少ない。東京文化財研究所の関野貞関係資料をもとに、日本人による韓国の伝統絵画の理解について研究した。具体的には日本による植民地朝鮮での博物館建設、そこでの収集展示活動、民間での収集活動を検討した。こうした活動から朝鮮時代絵画は日本の統治政策を背景に近代における美術としての位置づけを得たものの、本来の朝鮮時代士大夫による文芸活動から離れた資料となった。これらの検討から近代において、日本は植民地朝鮮の伝統的絵画について、博物館で収集や展示を行ったが、理解は限られた研究者によるもので、価値観は日本の美術観を当てはめたものであった。

研究成果の概要（英文）：Along with the theme of how Japan was interested and understood Joseon Dynasty paintings in modern times, the survey was conducted collecting and exhibitions of paintings through public facilities and private sector in colonial Korea. This involves examining the creation of a new value of ‘art’ from a point of view in modern Korea, which has been confirmed by the collection and exhibition activities of the museum in colonial Korea. Also, in the private sector, collection activities were initially active mainly among Japanese, and the art market was gradually opened with the addition of Koreans. However, in terms of the understanding of Korean traditional paintings, researchers who participated in them were only a few characters, including Sekino Tadashi, and they did not fully understand the painting activities of Joseon Dynasty.

研究分野：美術史

キーワード：李王家博物館　朝鮮総督府博物館　関野貞　近代美術市場　朝鮮美術館　朝鮮名画展覧会　京城美術倶楽部

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

東京文化財研究所に所蔵される朝鮮時代絵画写真カードと関野貞による朝鮮時代調査野帳を未紹介資料として確認し、第二次世界大戦終了以前の日本人による朝鮮時代絵画への研究の状況を探ることとした。これは研究者がもともと日本の水墨画を理解するために朝鮮時代絵画についての先行研究を確認しようとしたことによる。

２．研究の目的

近代の朝鮮時代絵画の収集や展示活動を確認することによって、朝鮮を植民地として統治した日本人による朝鮮時代絵画への理解・関心を確認する。それはほぼ同時に文化的に近代化の歩みを始めた朝鮮が日本によって近代化されていったと思われるが、その具体的な内容を確認する。このことにより朝鮮時代絵画への理解を深めることをめざした。

３．研究の方法

東京文化財研究所の調査カードをもとに、書かれた情報や関野貞の活動を追うことによって、近代に日本が植民地とした朝鮮で、韓国の伝統的絵画を美術と位置づけ、そのことによって絵画の収集や展示を行う活動がさかんになった様相を確認するという方法をとった。

調査を進めるにしたがい、多くの関係資料は韓国に所蔵され、またその研究もほとんどが韓国の研究者によって進められていることを認識し、韓国の研究論文を解読することや韓国の研究者との研究会を通じた討議が有効だと考え、２年目と３年目に韓国研究者を招聘して共同研究会を日本で開催した。

４．研究成果

研究成果　研究前に掲げた４つの目標について成果を述べる。

（１）目標 1.　近代の日本と統治下朝鮮で、朝鮮時代絵画をどのような態勢で、具体的にどのような作例を収集したか。とくに李王家博物館、朝鮮総督府博物館を中心にとらえる。

朝鮮時代末期より行われた市井での書画売買および海外向けの販売、複製制作

韓国では朝鮮時代における書画への視点が玩物喪志、すなわち書画や文物に志を奪われることを嫌う思潮が、儒教の考えから強く、士大夫の高邁な精神から書画を制作することに専念したり、取引することは高貴な人格にはふさわしくないとの観点があった。

しかし、朝鮮時代後期より閭巷文人とよばれる両班など高位の士大夫になることができないが、文人的趣味を備えた書画に関心の高い人々が余技的な絵画制作や鑑賞活動を積極的に行った。彼らによる文学、性理学にもとづいた審美的文人主義は朝鮮時代後期に盛んとなり、絵画の創作、鑑評活動は次第に下級官僚や官民をも含んだものになった。

彼らは既存の地位や価値観よりは、文物を趣味や芸術の視点で見る、また、それを手に入れる経済力を持ち合わせていたといえる。こうした新しい文人勢力の書画活動が活発する京城の広通橋、仁寺洞などに書画、書籍を売買する書肆が出現して活況を呈した。広通橋は鍾路区、清渓川にかかる橋で、この周辺に書画やその画材などを販売する店舗があった。19 世紀後半は朝鮮の開港期にあたり、西洋人も含めた外国人が国内に滞在し、朝鮮の美術品を土産物として買い求めた。風俗図については、近代の作家による創意によるものや金弘道の図を写して複製を作ることも行われた。広通橋の付近にはもともと画員の図画署があり、そこへ画員だけでなく、民間の画家も集まり、吉祥の図様を描き販売した。

・日本の統治政策による博物館開設および展示

19 世紀末期、日本が朝鮮に積極的に進出するのに伴い、朝鮮へ渡った日本人は韓国の伝統的美術へも関心を持った。その代表的な対象が高麗磁器であった。本来、王墓などの副葬品として、朝鮮時代の王家にも多く伝わらなかった工芸品であるが、日本人を中心に外国人が収集に熱心な状況となった。それは王墓からの盗掘という文化財の保存、保護のうえで疎むべき背景を伴いながら、伊藤博文をはじめ、統治した日本高官が収集を促した。それはいわゆる美術品としての価値を認めたというよりも新奇な骨董品、あるいは自国への土産物と

して集められた観がある。

① 李王家博物館

1907年に英宗の退位を機に昌慶宮に博物館、美術館、そして動物園、植物園を設置するという提案がなされた。李王職小宮三保松によれば、これは朝鮮官吏李完容、李允用からの提案で、王の慰めのための施設という。これを李王家博物館発足の事情とするが、博物館の周辺は1909年に昌慶苑として開園した当初より、一般市民に開放された空間となった。

植民地朝鮮において、博物館が建設されたことにより、朝鮮における近代的な「美術」の認識、文化財管理上の進展があったと考える。考古学による発掘の遺物や伝統的な工芸品、書画が博物館資料としての価値、位置を得たといえよう。

李王家博物館の資料については 1912 年、1918 年、1934 年と 3 期にわたって収蔵品写真帖が刊行されて、収蔵品の一部が確認されるが、絵画については、それらのほとんどが今日の国立中央博物館に所蔵され、その所蔵カードなどで入手経緯の確認が必要である。

韓国での近代的な「美術」の認識については、諸氏の見解がある。朝鮮時代末期の市井での書画収集、開港期の外国人による収集活動、また、日本人を中心とする高麗磁器の収集などである。この中で博物館活動の中で資料として収蔵されたことは一つの大きな契機といえよう。ただし、こうした価値観は西洋の美術観あるいは文化財の視点を持って、日本人によって位置づけられたもので、それまでの韓国の人文文化を背景にしておらず、書画の意味を大きく損なっていたといえよう。

李王家博物館の収集は、日本人の李王職職員によって行われたが、その指導にあたったと思われるのが、鮎貝房之進である。李王家博物館所蔵品写真帖の絵画部の概説を書いたのは鮎貝であった。鮎貝は朝鮮の伝統的工芸品、具体的には陶磁器を積極的に収集し、書画もその中に含まれた。したがって鮎貝は韓国美術の先駆的な収集家であり、その収集をもとにした実質的な研究者であった。

② 朝鮮総督府博物館

1915 年の治政 5 周年記念博覧会が景福宮を会場に開催された。この会場の美術館に使われた建物を一部として同年 12 月に博物館が開設された。その主な目的は朝鮮総督府が主体となった考古調査などの遺物の保管、管理であったが、同時に工芸品、書画も収集された。書画の収集の記録から、出品業者、評価額、評価者（鑑定者）など経緯が判明する。1920 年代以降、総督府博物館での書画収集は活発ではなかったとする意見もあったが、これら史料によって、その後も継続して収集が行われたことが判明した。

日本が主体となって運営した博物館での書画の収集の特徴は、李王家博物館所蔵品写真帖にもあるように、絵画を主体とし、その絵画史観、具体的に言うと書画人伝の中の絵画に秀でた人物を画家として列記するという、いわば日本の画人史のように韓国の書画人を扱ったことであろう。

③ 京城美術倶楽部など民間の競売、販売

博物館のような公的な施設以外でも書画の収集がさかんになっていった。こうした活動の大きな起点になったのが 1922 年日本人によって開設された株式会社京城美術倶楽部であった。ただし当時競売を行ったのは京城美術倶楽部のみではなく、複数の業者が時期を追って京城に存在した。

日本人では政府の高官や京城大学の教員、朝鮮で成功した事業主、朝鮮人では政治家、軍人、医者など地位を得たものや経済的に成功したものが美術品を収集したが、多くは資料を手放す、あるいは失う中で、ソウル大学校や高麗大学校などに寄贈されたり、潤松美術館を設立する等、今日に伝わる資料もある。ただし、京城美術倶楽部において書画については主要な競売品ではなく、個人所蔵家の売り立てなどで、しだいに競売されたことが京城美術倶楽部内覧目録からうかがえる。

（2）目標 2. こうして収集された絵画はどのように公開＝展示されたか。日本と統治下朝鮮においてそれぞれの朝鮮時代絵画の展覧会の様相を追う。

韓国の近代における書画の展覧会は 1918 年 12 月に釜山において、釜山日報の後援で「新古書画大展覧会」が開かれた。その後、1929 年朝鮮美術館が設立され、その年 9 月に古今書画展、翌年 10 月に第一回朝鮮古書画珍蔵品展覧会が開催された。出品作品の所蔵者は朝鮮美術館（呉鳳彬）、呉世昌をはじめ京城の個人所蔵者、

晋州の朴在杓などで、森悟一、和田一男など日本人も含まれた。会場は後援した東亜日報社の社屋であった。

この展示を見て、関野貞が朝鮮美術館の呉鳳彬に会い、日本での朝鮮絵画展覧会を決意したという。関野は昭和 3 年には東京大学を退官し、美術研究所の嘱託になっていたことによるかと考える。朝鮮総督府とは関連があり、『朝鮮古蹟図譜』の続編として絵画編を刊行するなどの目論見があったのではないか。したがって、関野が古書画珍蔵品展覧会を偶然に観覧したのではなく、美術研究所の職務として、京城の書画情報を入手することに大きな意義があったと思われる。また、その主催者であり、京城の有力な所蔵者、また、ほかの所蔵者への働きかけができた呉鳳彬に出会い、協力を求めたのも納得がいく。

呉鳳彬は呉世昌の指導で 1929 年春、光化門に朝鮮美術館を創設して、書画の収集と展示にあたった。書画の収集は呉世昌の『槿域書画徵』の編纂、刊行と並行して行ったことで、韓国の伝統文化の顕彰、国外流出の回避を目指したが、呉鳳彬は書画の販売も行った。

関野は呉鳳彬の合意をとりつけ、日本での韓国絵画展覧会を開催する準備を行う。関野は電報で総督府に指示を送り、朝鮮側委員が作品選択を行い、日本へ送った。

京城での古書画珍蔵品展覧会の翌春 1931 年 3 月末に東京府美術館で朝鮮名画展覧会が開催された。出品作品は目録では 255 件、追加目録が 10 数件であるが、400 点近い大展覧会と伝える。本展覧会は日本で開催されたほぼ唯一の大規模な韓国の伝統絵画の展覧会であった。開催の主催は国民美術協会であったが、多くの海外展覧会を主催した協会は展覧会の運営を託されたのみであろう。その主体は関野貞と朝鮮総督府にあったと思われる。

この 1931 年春は関野が朝鮮において本格的に調査を行う前であり、また、彼が『朝鮮美術史』（1932 年刊）の執筆を終える前であった。したがって、展覧会は関野がすでに調査した古墳壁画の写しや、おそらく朝鮮側委員の推薦による李王家博物館、朝鮮総督府博物館の所蔵品が中心となった。しかも、これらは前年の京城での古書画珍蔵品展覧会の作品とはほとんど重ならない。関野は古書画珍蔵品展覧会の内容に関心を持ったのではなく、展覧会という発表形式を必要としたのではないだろうか。また、1929 年、安堅の夢遊桃源図の存在が確認され、内藤湖南ほかその価値を評価する論文が公表されたのも契機となったかと思われる。

東京府美術館という大きな会場を使って、できうる限りの作品を集めた展覧会であったが、日本の市民への反響は薄かったというのが事実ではないかと推測する。会場となった東京府美術館の後継である東京都美術館、東京都の資料にも本展覧会についての資料は見当たらない。開催したことさえ記録にない。これはこの展覧会の大きな目論見であったと思われる植民地文化の日本国内への浸透、すなわち内鮮一致を標榜するには関心を高めることができなかった結果であろう。

朝鮮名画展覧会は 1931 年春の東京での開催の後、同年 6 月に京城において、再び開催された。経費の面から日本所在の作品をのぞいて、景福宮後宮において開催されたが、それまでの京城での書画展覧会とは異なり、李王家博物館、朝鮮総督府博物館の絵画のみを展示した。これは総督府が主体となって行ったことによるものであった。京城ではその後も 1938 年 11 月 8 日から 12 日まで朝鮮美術館主催の書画展覧会「朝鮮名宝展覧会」を開催し、委員には日本人も含まれた。1940 年に朝鮮美術館 10 周年を記念する「十大家山水風景画展」を開催した。

（3）目標 3.　第二次大戦終了前の朝鮮時代絵画の研究がどのように行われたか。とくに関野貞博士の調査のようすを東京文化財研究所の調査カードで追っていきたい。また、その調査にかかわった人物や状況を関野博士の日記やそのほかの資料から分析したい。

東京文化財研究所の朝鮮時代絵画調査カードによって、美術研究所での朝鮮絵画調査の様相が見える。すなわち、美術研究所が発足して、アジアの美術を調査対象としたが、具体的には関野貞の調査活動、そして 1931 年の朝鮮名画展覧会の出品作品の一部を写真撮影し、調書を作成しているものが多い。

関野の調査野帳のカードは、関野の日記と照らし合わせると、その調査のようすが判明する。関野は李王家博物館、朝鮮総督府博物館の所蔵品を改めて調査するほか、朝鮮の京城や晋州の個人所蔵者の絵画作品を集中的に調査した。ほぼ 1 日で一人の所蔵者の主な作品を調査しており、資料名と作者、員数、品質などを記入し、大きさは記入することもあった。

両班士大夫の間では書画活動があくまでも余技であり、彼らの活動の中で末技として位置付けられていて専門家として扱われることを嫌うという性質があった。韓国の書画人伝は呉世昌による伝記の編纂によって 1928 年『槿域書画徵』が公刊されることによって、大衆に書画人伝が認識されるようになった。

これ以前に 19 世紀末期に朝鮮に渡った日本人によって絵画史が編まれた。それは美術史の専門家ではない、ジャーナリストや言語学者など、いわば朝鮮学者とよばれる人たちであった。大岡力の『朝鮮』誌上に連載した絵画史が近代でもっとも先行したものと思われる。鮎貝は高麗青磁の先駆的研究者として韓国ではよく知られるが、大岡に続いて、韓国絵画史を編んだ。彼らの視点は帝国主義を背景として、植民地の文化を貶める表現が含まれるが、全時代に渉るのではなく、三国時代や高麗時代には優れていた美術が朝鮮時代には衰えるというように考えた。

しかし、これらの認識は朝鮮時代の文人文化をよく理解しないためにおこった視点で、朝鮮時代の書画文化を追うことなく、日本での近代的な美術観に合うコレクションから書画人伝と作品を照らし合わせるという絵画史を編んだ。そこには「清賞博覧」といった文人たちの理想はなく、文人たちの嗜好、価値観を無視した描写表現の強弱による価値づけによる絵画史であった。

（4）目標 4.　これら第二次大戦前の収集、展示が今日にどのように継承されたかを追う。それには日本と韓国の現在の朝鮮時代絵画の収蔵の状況、その成立の経緯を明らかにする必要があろう。

近代に収集されたコレクションは李王家博物館の資料は 1934 年西館を増設した徳寿宮の李王家美術館へ移行し、徳寿宮旧蔵資料となり、朝鮮総督府博物館の資料をあわせて、1951 年には南北戦争（朝鮮戦争）のために、梱包され疎開した。その後、博物館は景福宮の敷地内で今日の国立民族博物館から総督府内、そして今日の二村の博物館へ移り、資料も移動した。

韓国での韓国絵画の研究は近代においてはわずかに高祐燮が 1930 年代に韓国絵画史を編んだが、その視点は日本人が記述した朝鮮時代衰退論にのっとったものであった。その後の研究の中にも日本による絵画史記述の用語など影響があると指摘される。

美術史としての跡付けよりも日本において韓国の伝統絵画のイメージを形成したのは、おそらく民画であった。韓国絵画＝民画というイメージ形成は、韓国美術というより民芸の表現として喧伝されたのではないだろうか。近年では韓国において民画を再認識する傾向があり、その制作背景なども明らかにされつつある。

本研究は関野の調査カードに導かれて、近代における日本の韓国の伝統的絵画の調査活動について考察した。その実態は韓国における伝統的書画を近代の日本の価値観で位置づけるというものであった。それは一見、近代化を推し進めたように見えるが、伝統的な文人的な書画活動を否定し、覆い隠す行為であったようにも見える。日本が主体となって開設した京城の博物館において、書画とくに絵画を主に収集し、博物館アイテムとして収蔵した。これは民間においても書画の収集を促したが、そこには書画を鑑評、創作した朝鮮時代の文人達とは異なる近代の政治や経済、医学界など新しい階層の有力者が集まり、彼らは博物館とは異なり書画共に収集を行った。

韓国の近代における絵画史編纂は確かに日本による作品収集と絵画史記述によって始まったと言えるかもしれないが、それは韓国の書画文化を部分的に語ったにすぎず、さらに探求すべきものであった。

今後、日本の統治による美術の近代化の具体的内容とその背景を探求するとともに、近代化以前に培われた書画の本来の価値やそれを制作、あるいは鑑評した人々の人文活動の中での意義を確認し、韓国の近代における美術活動を振り返ることが必要であろう。日本がかかわった韓国の近代におけるさまざまな美術活動のなかで、韓国の伝統的絵画への視点をさらに深めることの必要性を認識した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２件）

１「近代コレクションから考察する韓国絵画史」渡邊雄二
九州産業大学芸術学部研究報告　第 50 巻　p119－133　2019 年　査読無

２「近代日本における朝鮮時代絵画研究－関野貞の絵画調査カードから－」渡邊雄二

韓昌哲財団研究論文集『青鶴』第１集ｐ162－183　2017 年　査読無
〔学会発表〕（計　３件）
１　第１回日韓交流美術史研究会　「朝鮮名画展覧会の開催経緯とその意味」2018 年 12 月 24 日
権幸佳　金相燁　渡邊雄二
２　第１回日韓文化財フォーラム　「関野貞の文化財調査にみる朝鮮時代絵画への関心」2018 年 7 月 14 日
李盛周　庄田慎矢　吉井秀夫　金容澈　渡邊雄二
３　日韓美術研究会　「関野貞調査カードと近代日本での朝鮮時代絵画研究」韓国国立中央博物館　2017 年 2 月 24 日　渡邊雄二
〔図書〕（計　１件）
１研究成果報告書『近代における朝鮮時代絵画の収集と展示』2019 年 3 月　研究費により作成　72 頁
権幸佳　金相燁　渡邊雄二
〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等
６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：
(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。